第57回「おかねの作文」コンクール

秀作

お金から学ぶ「自分と社会の関係」

大阪府・大阪教育大学附属池田中学校　3年　澤野　美菜

近年よく「賢くお金を増やす」という言葉を聞くようになったが、その手段に「投資」があげられることがある。私は今まで、賢くお金を増やすことができるのならばそれだけで十分だと思っていたし、お金にモノの対価という以上の役割はないと考えていた。しかし、新聞で投資やお金についての記事[注)]を読んでからお金への向き合い方が変わった。

記事によると、そもそも投資が増えても金融機関が手数料で儲(もう)けるだけで、社会全体ではお金が移動するだけなのだそうだ。投資が社会をより良くするのは、投資された人が人の役に立つモノを創るからで、そのモノが売れてはじめて投資した人も儲けることができるという。記事には「今の投資ブームをギャンブルにせずに経済や社会の成長に繋(つな)げるためには、みんなが『自分とお金の関係』だけでなく『自分と社会の関係』を知ることが必要」ともあった。金融教育の内容が拡充され投資に触れる機会が増えているが、投資を儲ける手段と考えるのではなくそのお金を受け取った人がより良い社会をつくるのを手助けしているということを忘れずにいたいと強く思った。もし、将来自分の投資したお金で誰かが良いモノをうみ出してくれたらうれしい。

また、米国では子供にレモネードを売る体験をさせ、「どうすればみんなが喜んで買ってくれるか」を考えさせるそうだ。そのようにして「お金は人の役に立てばもらえる」と理解した人々が人の役に立つモノやサービスをうみだす側、またそのために投資される側になろうとするのだという。さらに記事には、「お金という道具を介して、われわれは支え合っている」とあり、気に留めたこともなかったけれど私達は見ず知らずの人によってつくられた服や食べ物を利用し、自分も大人になれば誰かのために働くと気づき、そこから普段意識しない人との繋がりだけでなく、お金が生活に必要な人との関わりを容易にすると共に、複雑化、グローバル化していくその繋がりをスムーズにするための道具だとい

©J-FLEC2024

うことを理解した。それから、お金を見るたびに自分がたくさんの人に生かされていることを再確認し、何をするにも感謝の念とそこからくる幸福感を覚えるようになった。

私は中学２年生のとき、学校の活動で障碍(がい)者への差別をなくすため校内で障碍のある方がつくったお菓子を販売したことがある。私はその取り組みの代表として団体様との連絡をしたり、販売形態を考えたりした。実際に社会で活動されている団体と連携し、さらに商品を売ってお金を得るということは初めての体験だったが、最終的に約４万5,000円の売上を得ることができた。その利益はすべて協力していただいた団体様へ寄附した。その団体様は仕事、衣食住を提供するなどして障碍のある方を手厚くサポートされていたからだ。担当者の方にもとても喜んでいただき本当にうれしかったのをよく覚えている。今思えば、自分にお金の利益はなくとも、それによって嬉(うれ)しい思いをする人がいて、社会がほんの少しでも良くなるという利益があるためこれは投資の仕組みと同じなのではないかと思う。さらに、このように誰かが誰かの役に立って得たお金を媒体としてさらにまた別の誰かの役に立つことをするのは良い連鎖だと思うので、もしかしたら自分が少しでもそれを手助けできたかもしれないと思うと改めてうれしい気持ちになった。

このように、お金を使うということは人と関わっていることでもあり、これからは、お金を大切にすることは今と変わらずともその影響、つまり「自分と社会の関係」を考えながら生活していきたいと思った。そうすることで今、いつもたくさんの人に感謝し、幸せな気持ちになれているからだ。お金を使うときにそのように思うことで、人と接するときにも自分の行動に責任を持てるようになった。お金は毎日見るものであり、感じるのは何かをしなければならないという重圧などでは決してなく、人への純粋な感謝なので、心から人に優しくできているような気もしている。また、記事を読んだり、このように考えたりすることによってお金への興味が高まったので、これからも探究していきたい。

（注）
読売新聞「社会につながる　きみのお金」2024年6月23日

©J-FLEC2024